

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：24506
 研究種目：挑戦的萌芽研究
 研究期間：2014～2016
 課題番号：26580087
 研究課題名(和文) コミュニケーション文体論の学術的意義とその教育性・社会性・国際性に関する研究

研究課題名(英文) The Role of Communicative Stylistics as a Scientific Research: Pedagogical, Social, and Global Perspectives

研究代表者
 寺西 雅之(Teranishi, Masayuki)
 兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：90321497

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、これまで文学文体論の知見をコミュニケーション研究・教育に援用し、外国語力およびコミュニケーション力の育成に関する教育的示唆を得ることを目的とした。特に、(1)これまで困難とされてきた「生きたテキスト」の収集、(2)日常言語の技法と文学性およびその文体的特徴の分析、(3)「書く」「話す」「プレゼンテーション」を中心とする発信力に重点を置いた言語教育改革、の3点に焦点を当て、「コミュニケーション文体論」の学術的意義の確立を目指した。さらに英語・日本語以外の諸言語を対象とした国内外の文体研究者とも協力し、コミュニケーション教育に関する提言を行った。

研究成果の概要(英文)：The overall aim of this study has been to learn pedagogical implications on English and/or communication studies by applying theory and knowledge of literary stylistics to the study of non-literary texts. This study has attempted to establish “Communicative Stylistics” as a new scientific research area by addressing the following: (1) the collection of “authentic” texts, (2) the textual analyses of literariness and narrative skills in non-literary discourse and daily conversation, and (3) the improvement in English education oriented towards output such as writing, speaking, and presentation. Finally, collaborating with educators and stylisticians in and outside Japan, we have made several proposals on ways language and communication education should be improved.

研究分野：英語文学、文体論、英語教育

キーワード：文体論 コミュニケーション 教育 文学テキスト ナラティブ 翻訳

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、研究代表者は、文学作品の文体分析と語学教育の融合を目指す「教育的文体論」の開発と研究を重ねていた(科学研究費基盤研究(C)「文学作品を用いた英語教育の教授法と教材の開発に関する研究」代表:寺西雅之(平成23~25年度)参照)が、その当時の研究の課題として、文体論が概ね難解で実験的な文学作品の理解・解釈に焦点を当て、そこには書く・話すを中心とする実用的なスキルの向上という教育的観点の欠如している点が懸念されていた。一方、「実用面」が重視されるコミュニケーションの分野では、文学教材の排除が進行し、国際舞台での意思疎通に不可欠な伝達力・説得力を支える文学的素養とスキルの育成が軽視されているという問題を抱えていた(この点は3年が経過した現在においても依然として課題である)。

研究代表者はまた、挑戦的萌芽研究「医療・心理・教育におけるナラティブ・データの汎用性の検証と分析手法の確立」(代表:奥田恭土、平成25~27年度)の研究分担者として、多様なナラティブの収集と分析にも着手していたが(現在は「医療・心理・教育」におけるナラティブ・データの分析手法の確立と文学研究への応用)(代表:奥田恭土、平成28~30年度)として継続中)研究開始当初はそれまで研究・分析の対象となっていない伝達力・説得力が必要とされる場合の言語データを収集し、その構造と改善点を明らかにすることが求められていた。さらに、(1)交渉、(2)教育者・指導者の言語、(3)緊急時の情報伝達、(4)案内(外国人向けガイド等)等スムーズで的確な意思・情報伝達が必要とされる分野の文体とコミュニケーションの特徴も研究対象とすべきと考えられた。

2. 研究の目的

本研究で明らかにしようとしたことは、(1)日常言語の技法とその伝達上の効果、(2)文体分析手法の開発・改善、(3)国際理解分野での教育的効果、の3点であった。(1)は、文学テキストに見られる文体・技法が、日常言語にも活用されていることを示すためのものであり、また意思・情報伝達力向上という教育的視点からも「効果的コミュニケーション」のメカニズムの解明は不可欠と考えられる。(2)は、比喩表現や逸脱等の「文学的技法」の分析に加えて、コーパス分析等の量的分析を導入することにより分析の精度を上げ、意思伝達のプロセスをより正確に捉えることである。(3)としては、まず文体論研究を日本人の発信力の向上に活かすことにより国際的なコミュニケーション力育成に寄与するという視点を重視した。また、複数の言語の特徴を比較することにより、社会・文化的な違いを明らかにするとともに、他文化・他言語の例に学ぶことにより、日本社会の情報伝達の効率化と円滑化に寄与することも視野に

入れた。

最後に、「非文学テキスト」の分析・考察を通じて、文学テキストの文体を再考することも本研究の重要な課題となった。

3. 研究の方法

本研究は概ね、(1)先行研究の精査と仮説の設定および研究手法の確立、(2)研究協力者との打ち合わせ、(3)言語データの収集および分析、(4)フィードバック、という手順で行われた。

(1)本研究を遂行するにあたり、まず *Contemporary Stylistics* (M. Lambrou, P. Stockwell 編著、2007年)、*Stylistics* (L. Jeffries, D. McIntyre 著、2010年)等研究の基礎となる文体論・コミュニケーション学の重要文献を精読・再読し、当該分野の最新の動向をまとめた。特に、日常言語の文体と芸術性・独創性を分析している *Creativity in Language and Literature: The State of the Art* (J. Swann, R. Pope, R. Carder 編著、2011年)等、本研究の目指す文体論とコミュニケーション研究の融合に直結する文献に関しては重点的に検証を行った。さらに、研究代表者が執筆(共著)した論文 *The role of stylistics in Japan: A pedagogical perspective*. *Language and Literature* 21 (2) (2012年)など日本における文体論の発展を扱った重要文献を再読・精査し、本研究の仮説の設定や研究手法の確立に役立てた。

(2)文体およびコミュニケーション研究の専門家によるミーティングを適宜行い、本研究の目的、手法等に関してアイデアを出し合い、できる限り緻密な研究計画を作成した。研究代表者が特に参考にした研究者は、斎藤兆史(東京大学大学院教授)、Michael Burke (Utrecht 大学教授)、Katie Wales (Nottingham 大学教授)、Michael Toolan (Birmingham 大学教授) 奥田恭土(兵庫県立大学教授)である。斎藤氏、Burke氏、およびWales氏には主に文体論と外国語としての英語教育について、Toolan氏には英語圏における非文学ナラティブの研究動向について、奥田氏には文体論およびナラティブ研究の最新の動向について、それぞれ意見とアドバイスを求めた。ミーティング・意見交換は、主に日本英文学会や国際文体論学会等の関連分野の学会期間中に行った。

(3)日常言語やインタビュー等のデータの収集は、研究者および研究協力者により、ボイスレコーダー等の機器を用いて行われた。なお、音声データには個人情報等重要な情報が含まれる可能性があるため、インタビューは、研究代表者が所属する大学の研究倫理委員会に申請し、許可が下りた後実施した。音声データの分析は、まず書き起こしによりテキストデータとしてまとめ、ナラティブ、文体論的な観点より、語り手・話し手の技法や効果・意図などについて分析・考察を加えた。

上記の日常言語の分析に加えて、新聞・雑

誌の記事、ポピュラーミュージック等の芸術作品、さらに詩や小説等の文学テキストからのデータ収集および分析も行った。収集したテキストは、メタファーや矛盾語法等の文体論的特徴や視点や話法の様式等の観点から分析・考察を加えた。

(4)フィードバックは、主に研究者の実践する英語教育およびデータを収集した協力者に対して行った。前者に関しては、研究者および研究者の指導する学生が収集したテキストデータを活用し、テキストに含まれる話法や視点がどのように解釈されるのかに関して、研究者の実践した授業において確認し、議論を行った。一方、後者に関しては、文体分析および考察をまとめ、話し手・語り手の意図と齟齬はないか等確認を行った。

4. 研究成果

研究成果の発表は、主には(1)学術論文、(2)学会発表、(3)科研費研究グループ主催シンポジウムの開催、(4)書籍出版、に分けられる(詳細は5.参照)。

(1)としては、日本英文学会 Proceedings、日本国際教養学会 Proceedings を中心に多様な種類のナラティブの分析および文体論の教育的効果について、主に6件の論文を出版している。

(2)としては、まず国際文体論学会(国際学会)での発表3件が挙げられる。この学会は本研究のテーマである文体論の最新研究が発表される場であり、本研究の成果を発表するとともに、当該分野の最新の動向を反映したフィードバックを得ることができた。

その他にも、日本英文学会全国大会、日本国際教養学会全国大会にてナラティブの分析および文体論の教育的効果について7件の発表を行っている。

(3)としては、まず平成27年11月28日に行われた公開シンポジウム「Literature and Language Learning—文学を用いた英語教育最前線—」が挙げられる。これは、本研究の成果に関して、特に文体論および文学作品の活用法と外国語教育をテーマにしたシンポジウムであり、本研究テーマの成果を広く社会に対して公開できる場となった。研究代表者が編著者の一人となっている研究書 *Literature and Language Learning in the EFL Classroom* の執筆者がそれぞれの立場から文学と文体・英語教育について語り、議論した重要なシンポジウムであった。研究代表者は、「Teaching English Novels in the EFL Classroom」という演題で発表している。その他の登壇者および発表タイトルは、高橋和子(明星大学教授)「Literary Texts as Authentic Materials for Language Learning: The Current Situation in Japan」、齋藤安以子(摂南大学教授)「Bridging the Gap between L1 Education and L2 Education」、奥聡一郎(関東学院大学教授)「A Stylistic Approach to Digital Texts:

Teaching Literary Texts through New Media」、西原貴之(広島大学准教授)「Achievement Tests for Literary Reading in General EFL Reading Courses」、石原知英(愛知大学准教授)・小野章(広島大学教授)「The Effects of Literary Texts on Students' Sentence Recognition: Translation Tasks and Comprehension Tasks」、中村哲子(駒澤大学教授)「Benefits of Teaching Speech/Thought Presentation: Developing Language Awareness through Reading Austen and Eliot」、久世恭子(上野学園大学准教授)「Using Short Stories in University Composition Classrooms」、坂本輝世(滋賀県立大学特任准教授)「Translation of Japanese Poems into English: Literature in the First Language as a Motive to Communicate in a Second Language」、草薙優加(鶴見大学教授)「Literary Reading Circles and Short Essay Activities for English Learning among Medical Students」、那須雅子(岡山大学准教授)「The Role of Literature in Foreign Language Learning」、深谷素子(鶴見大学准教授)「The Use of a Literary Text in an Extensive Reading Programme: Reading Murakami's 'Super-Frog Saves Tokyo' in the World Café」、Mark D. Sheehan(阪南大学教授)「Increasing Motivation and Building Bridges to Content with Graded Readers」で、当日はコメンテーターとして齋藤兆史氏(東京大学大学院教授)が参加した。

もう一つのシンポジウムは、平成28年11月19日に開催された「英学シンポジウム—文体論で極める文学とコミュニケーション—」である。本シンポジウムでは、まず研究代表者が「文体論の学術的意義—文学批評からコミュニケーション研究まで」という演題で、シンポジウムの趣旨と文体論の汎用性について論じた。次に田畑智司氏(大阪大学大学院准教授)が「デジタルが拡張するテキスト分析と文体論: Stylometry の現在」という演題で文体研究におけるコーパスの役割について最新の動向とデータを用いて論じた。続く2件の招待発表: 重松恵梨氏(広島大学大学院博士課程後期)「小説と意識描写: ダニエル・デフォーの語りの技巧」および那須雅子氏(岡山大学准教授)「ウルフとユング: 無意識世界の描写に関する文体論的考察」は、文学ナラティブの内面描写に関する分析と考察であった。最後に齋藤兆史氏(東京大学大学院教授)は「創作文体論と英語コミュニケーション」と題し講演し、文体論を英語創作演習に援用した授業演習が、日本人英語学習者のコミュニケーション力育成に繋がる点について論じた。このシンポジウムには、英語・文体論を専門としない研究者・教員・学生も参加しており、当該分野の研究成果を社会に公開する貴重な機会となった。

(4)として、以下の3件の書籍を挙げておき

たい。

M. Burke (eds.) *Stylistics*. London: Routledge. 2017

M. Burke et al. (eds.) *Scientific Approaches to Literature in Learning Environments*. Amsterdam: John Benjamins. 2016, 326.

M. Teranishi et al. (eds.) *Literature and language Learning in the EFL Classroom*. London: Palgrave Macmillan. 2015.

は、現在も認知言語学・コーパス言語学・外国語教育等様々な視点を取り込み発展を続けている文体論の「ベスト論文集」であり、本書には研究代表者の執筆した“A Stylistic Analysis of *Herzog*: A Mode of ‘Postmodern Polyphony’”が収録されている。

は、文体論、言語学を中心とする科学的視点を英語文学教育に援用することを目的とした論文集であり、研究代表者の執筆した“Literature and the Role of Background Knowledge for EFL Learners”が収録されている。

は、日本・英国・オランダ・米国・中国の研究者が執筆者として参加した論文集であり、研究代表者は共同編集者および第11章“Teaching English Novels in the EFL Classroom”の著者として参加している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6件)

金谷和香、鎌田那奈、竹野朝美、寺西雅之、「「グローバル人材」育成プログラムの現状と今後の課題～現役国際人へのインタビュー調査から～」、『兵庫県立大学知の交流シンポジウム 2016 要旨集』、2016、63

山崎真由、寺西雅之、「“ZINE”の社会的役割とその形式的特徴～衰退する紙媒体の可能性を ZINE から考える～」、『兵庫県立大学知の交流シンポジウム 2015 要旨集』、2016、40

西側恵莉香、寺西雅之、「英語版カバーアルバムに関する文体論的アプローチ」、『兵庫県立大学知の交流シンポジウム 2015 要旨集』、2016、39

寺西雅之、「“日本発”グローバル発信例～英語・文学教育の“国際化”～」、『日本国際教養学会プロシーディングズ』、2014、1-2

寺西雅之、「英語教育とグローカリズム：発信力育成における文学教材の役割」、『日本英文学会第 86 回大会 Proceedings』、2014、29-30

塩谷望、西側恵莉香、山崎真由、寺西雅之、「グローバル人材の育成を目指して～英語学習成功者のインタビューから学ぶ

～」、『兵庫県立大学知の交流シンポジウム 2014 要旨集』、2014、55

〔学会発表〕(計 10件)

寺西雅之、「文体論の学術的意義 - 文学批評からコミュニケーション研究まで」、『英学シンポジウム『文体論で極める文学とコミュニケーション』、2016年11月19日、兵庫県立大学環境人間学部(兵庫県姫路市)

寺西雅之、「クラスルームで学ぶ UK ROCK—英語学習から社会・文化研究へのステップに—」、『JACET 文学教育研究会 2016年10月例会、2016年10月22日、同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市)

Masayuki Teranishi and Masako Nasu, “Reading authentic materials: A qualitative study of highly successful foreign language learners’ interviews”、国際文体論学会(Poetics and Linguistics Association)第36回大会、2016年7月30日、カリアリ大学(イタリア)

Masayuki Teranishi、 “A stylistic analysis of plebeian narrative: A case study of two elderly women at a Japanese nursing home”、国際文体論学会(Poetics and Linguistics Association)第36回大会、2016年7月29日、カリアリ大学(イタリア)

寺西雅之、“Teaching English novels in the EFL classroom”、公開シンポジウム—Literature and Language Learning～文学を用いた英語教育最前線～、2015年11月28日、京都大学(京都府京都市)

Masayuki Teranishi、 “Stylistics and translation in the EFL classroom”、国際文体論学会(Poetics and Linguistics Association)第35回大会、2015年7月18日、ケント大学(イギリス)

寺西雅之、「ことばから見える日本文化：文体・コミュニケーションの視点から」、『日本比較文化学会関西支部 3月例会、2015年3月7日、同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市)

寺西雅之、「Literature and Language Learning in the EFL Classroom：グローバリズムと英語・文学教育」、『JACET 文学教育研究会 10月例会、2014年10月25日、同志社大学今出川キャンパス(京都府京都市)

寺西雅之、「文学作品を用いた英語教育 - グローカルな視点から」、『岡山英文学会年次大会シンポジウム：英語教育における高大連携—これからの英語教育を考える—、2014年10月4日、岡山大学(岡山県岡山市)

寺西雅之、「英語教育とグローカリズム - 発信力育成における文学教材の役割 -」、『日本英文学会第 86 回大会、2014年5月

24日、北海道大学（北海道札幌市）

〔図書〕（計 3件）

M. Burke 編、M. Teranishi 他著 .
*Stylistics: Volume II Pragmatics,
Discourse and Narrative.* London:
Routledge. 2017. 334(256-272)

M. Burke, O. Fialho, S. Zyngier, D. S.
Miall, F. Hakemulder, E. Koopman, M.
P. Bal, S. H. Chard, D. Peplow, O.
Vassallo, A. Chesnokova, S. Liu, Z.
Zhang, C. Zhang, T. Nishihara, M.
Teranishi, M. Nasu, T. Janssen, M.
Braaksma, D. I. Hanauer, F. Y. Liao, V.
Sotirova, M. Mahlberg, P. Stockwell, V.
Viana. 著 *Scientific Approaches to
Literature in Learning Environments.*
Amsterdam: John Benjamins. 2016,
326(167-187)

M. Teranishi, Y. Saito, K. Wales 他編著
*Literature and language Learning in
the EFL Classroom.* London: Palgrave
Macmillan. 2015. 336(1-336)

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://jaila.org/activity/taikai20160313/rep20160313.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

寺西 雅之 (TERANISHI, Masayuki)

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：90321497

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

齋藤 兆史 (SAITO, Yoshifumi)

マイケル バーク (BURKE, Michael)

ケイティ ウェールズ (WALES, Katie)

マイケル ツーラン (TOOLAN, Michael)

奥田 恭士 (OKUDA, Yasushi)